

第6回 「日本語大賞」

テーマ

いま つた ことば
「今、伝えたい言葉」



中学生の部 優秀賞 受賞作品

父から私へ

大阪府

大阪教育大学附属池田中学校

3年 谷口 知聡

父から私へ

大阪府 大阪教育大学附属池田中学校 三年 谷口 知聡（たにぐち・ちさと）

人間万事塞翁が馬。「お父さんの座右の銘だよ。」私の父は時折嬉しそうにこう言います。運命の吉凶は予測できない、という意味のこの言葉は、父の育った家にも飾られていたそうです。「なぜこの言葉が座右の銘なの？」と訊いてみると、父はこんなエピソードを語ってくれました。

父は小学一年生の時、交通事故に遭いました。足を骨折してしまった父は、しばらくの間自由に動くことができなかったそうです。しかしそのことが、やんちゃで外へばかり行っていた父が算数を好きになるきっかけとなったのでした。その後父は大学で理系に進み、現在の仕事に生かされたようです。

父とのこの会話がきっかけとなり、私は「塞翁が馬」という言葉について調べてみることにしました。

この言葉は、中国に古くから伝わる古事成語の一つで、『淮南子』という書物に書かれています。それはこんな話です。

ある日、塞の近くに住む翁の馬が遠くへ逃げてしまいました。人々は彼をなくさめましたが、彼は「いや、これが福になるかもしれぬ。」と言いました。数ヶ月後、翁の言った通りその馬が良馬をつれて帰ってきました。人々はうまいことをしたと祝いましたが、翁は「これが禍になるかもしれぬ。」と静かに喜んでいました。すると、彼の息子がその馬から落ちて足を折ってしまいました。人々が見舞いに行くと、翁は「いや、これがどんな幸いとなるかもしれぬ。」と樂觀していました。一年程すると、兵が攻めてきて健康な若者は戦争で死んでしまいました。しかし、翁の息子は足が悪かったので無事だったのです。

思い返してみると、私も何度かこのような経験をしたことがありました。私も、小学一年の時に治療の難しい足の病気にかかりました。最初は何の病気かも分からずに、歩くこともままならないまま不安と痛みに耐えていました。そして、四つ目の病院で二回の手術を受け、やっと病気を治すことができました。病気はともつらいものでしたが、今では、この経験があったからこそ、人の痛みが分かるようになり、健康でいられることのありがたみを感じられたと思います。

私は「塞翁が馬」という言葉に込められた、「何事にも一喜一憂し、目の前のことばかりに心をうばわれるのではなく、大きな心でものを見てゆこう。」というメッセージ、そしてその言葉が中国から日本へ、そして親から子へ、国境や世代をこえて受け継がれているということに大きな魅力を感じました。

しかし、最近では、新しい言葉が生まれ広がり、古き良き言葉が日常会話から消えていきつつあるのが現状です。自然や文化、建築物などは、「世界遺産」などで守っていくことができませんが、「言葉」を保護する取り組みはあまり耳にすることがない気がします。私は「言葉」も、自然や文化と同じように、歴史と生命のつながりを表すとても重要なものだと思います。

だから私は、祖父から父へと伝えられたこの言葉を受け継ぎ、私自身の「座右の銘」にしていこうと思います。そしてそれを、自分の子どもにも伝えていきたいです。そうすることが、古き良き言葉を守る第一歩になるのではないかと思います。

古い言葉は、昔からずっと伝わってきたからこそ、今もなお私たちに人生の真理を教えてくださいるのではないかと思います。先人の言葉に触れ、先人の教えを味わうことで、私たちの生活はもっと豊かなものとなるのではないのでしょうか。